

弔辞 車信一郎君（享年51歳）

君の変わり果てた姿に接し、信じられない思いでいます。

思い起こせば車君にはじめてお会いしたのは、2年半前の京大理学研究科宇宙物理学教室の大学院入試の面接のときでした。そのとき20代の多くの受験生に交って、50歳目の君が面接に現れたときは、面接に立ち会った宇宙物理教室と天文台の教員一同、大いに驚いたものでした。経歴を見ると大阪大学工学研究科博士課程修了。太田教授が、「ひょっとして工学博士ですか？」と質問したら、「そうです」という返事があって、少しどよめきが上がったのを良く覚えています。専門はレーザープラズマ、大阪大学時代の指導教員が三間圀興教授と聞いて、また驚きました。三間先生は、テキサス大滞在（1987年～1988年ころ）から田島俊樹教授を通じて良く存じ上げていましたから、世間は狭いものだと思います。宇宙における光と粒子の相互作用に関する理論研究をやりたいとのこと。レーザープラズマを修めただけでは飽き足らず、50歳にならんとする年齢で、新しい分野に挑戦しようという心意気に打たれ、私が指導教員になることに決めました。この長寿の時代にあって、50歳からの人生再挑戦は、後に続く若者たちに夢と勇気を与えるものでした。

大学院修士課程では、専門分野が宇宙物理学・天文学となって、君のこれまでの分野であるレーザープラズマとかなり異なり、苦勞したようでしたね。研究テーマは、マグネターにおける磁気リコネクションの基礎過程。宇宙最強磁場中性子星であるマグネターでは磁場があまりにも強いので、磁場の変動でできる電場が真空破壊を引き起こし電子陽電子ペア生成が起きます。それがカップルした磁気リコネクションは、まだ誰も手をつけていない基本問題なので、それをまずやろう、ということで君との共同研究が始まりました。宇宙・天文の基礎知識があまりない君は問題の背景のところで、多少苦勞したようでしたが、最後は君の頑張りもあって、修士論文研究では世界初の興味深い成果が得られました。修士論文発表会での発表に関しては、予想以上に他の先生方からの評判が良く、指導教員の私も大変嬉しかったのを覚えています。修士論文の成果で二つくらいは専門誌に投稿できる英語論文が書けそうでした。そこで、この3月に実家に帰ると言うので、実家でしっかり英語論文のドラフトを書いてくるように言い、京都に戻ったら一緒に英語論文を完成しよう、と約束しました。さらにそれをスタートに、今後博士課程では量子電気力学がカップルした磁気リコネクションという誰もやっていない問題に挑戦しよう、ノーベル賞につながるような新しい問題にチャレンジしよう、と夢を語り合いました。それがこのような結果になり、無念で仕方ありません。残念で仕方ありません。

君は大学院生の中では、きわめて異例でした。何しろ年齢は私よりわずか5歳若いだけ（享年51歳）。しかしおかげで、私は君とは話が良く合いました。懐メロの説明をする必要は全くありませんでした。まるで弟のような存在でした。ですから、弟に先立たれたような気分です。第一報を聞いたときのショックは言葉に表せないほどでした。

今回、大学院の一つ後輩である玉澤君が、京大宇宙物理学教室の院生会を代表して京都

から小樽での葬儀に参列してくれました。一昨日、君の急逝の連絡を受けて、大学院生の仲間たちが小樽でのご実家での葬儀に参列しようという相談をしているという話を聞いて、私が知らなかった君の側面を知りました。若い周りの大学院生諸君にそれほどまで慕われていたのかと感動する思いでした。また、やはり一昨日、君のかつての大阪大学時代の仲間の岸本さん（現京大教授）や三間先生に連絡しましたら、その関係で、多くのプラズマ分野の研究者の方から追悼のメールをもらいました。「激昂している車君を見たことがない」、「いつも飄々としていた」と皆さん、車君を慕っておられました。車君の心やさしい一面を見る思いでした。

最後の日となった3月11日は、東日本大震災が起きた日でした。ですから、車君急逝の報を受けたときは地震に巻き込まれたのかと思ったほどでした。これも何かの因縁でしょうか？ この数日、大地震をねぎらう、安否をたずねるメールが世界中の研究者仲間から届いています。その返事には必ず、「私自身は大丈夫だが、大地震でショックを受けています。しかし、それ以上に私の教え子の車君が亡くなって大きなショックを受けています」と書いています。車君の名前は、3月11日の東日本大震災と合わせて、世界中の私の友人に記憶されることでしょう。

車君の残した研究成果は私が責任を持って論文にまとめ、世界に伝えたいと思います。車君の研究は私たちが引き継いでいきたいと思います。

安らかに眠りください。合掌。

2011年3月15日 小樽にて 柴田一成